

論 文

ヘボンの「栄光」

吉野政治

同志社女子大学
表象文化学部・日本語日本文学科
特別任用教授

On the Word "Eiko" (glory) in "According to S.Luca" translated into Japanese by J.C.Hepburn

Masaharu Yoshino

Department of Japanese Language and Literature,
Faculty of Culture and Representation, Doshisha Women's College of Liberal Arts,
Special Appointment Professor

はじめに

現在「栄光」と訳されている語は、慶長年間に出版されたキリシタン本ではラテン語 *gloria* の音訳語「ごらうりや」「ぐらうりや」が用いられていた(注①)。

○弟 だいニかどうにはなに事をこひ奉るぞ。

師 みよきたりたまへと、此のころはあくじとつみをのがれ、※(引用者注—*Deus*を表わす符合)とその御子※(引用者注—*Iesu Christo*を表わす符合)よりげんせをいってはがらさ、ごしやうにをひてはごらうりやをもてわれらをしんだいたまへといふぎなり。

(一六〇〇年刊『ドナリナキリシタン』巻三)

○弟 もるたるとがはあにまのためにかなる損となるぞや。

師 そのそんおほき中にもとりはき御さくしや※にはなれ奉り、がらさと、御やくそくのごらうりやなるばらいぞのけらく、又は御あるじの御ちをもてすくひ玉ふわがにあにましきしんともいんへるの、人数とさだまり御あるじ※の御はしよんの御くりきと、又もるたるとがにけがれずしてゐたるあひだにつとめし所のぜんじのどくをもうしなふ者也。(同右巻九)

○もしのべさせらるゝにをいては、わがたよりかくごなく、ときすぎときいたりてあらはるべきぐらうりやを、いまだうくべきくりきなしと心得べし。しかるときんば、よくしするためにかくごする事をなげ。

(一六一〇年刊国字本『こんてむつすむん地』巻第十七章二十四節)

1) *gloria* (英 *glory*) の訳語「栄光」が和訳聖書に始めて現われるのは、ヘボン(J.C.Hepburn)の『新約聖書卷之三 路加傳福音書』(明治八年〔1875〕刊)のようである。本稿では、この初出例をめぐって考えてみたい。

1 欽定英訳の福音書における *glory*

ヘボン訳の福音書は、彼の日本語教師であった奥野昌綱とブラウン(S.R. Brown)の援助を得て訳されているが(注②)、その日本語訳は英訳聖書と漢訳聖書に拠るところが大きかったようである。ヘボン訳は後に聖書翻訳委員社中(明治十一年から「委員会」)によって手が加えられたが、その翻訳委員社中による翻訳も、原典主義を採ってはいないが、実質的には英訳聖書と漢訳聖書に負うところが多いようである(注③)。

この英文訳書は、イギリス王の命により、新編英訳書（The Authorized Version. King James Version 1611）の英訳書に、聖書に「glory」（栄光）と訳すことになった。

Matthew

- ① 4-8 Again the Devil taketh him vp into an exceeding high mountaine, and sheweth him all the kingdomes of the world, and the glory of them:
- ② 6-13 And lead vs not into temptation, but deliuer us from euil: For thine is the kingdome, and the power, and the glory, for ever. Amen.
- ③ 6-29 And yet I say vnto you, that euuen Solomon in his glory, was not arayed like one of these.

④ 16-27 For the sonne of man shall come in the glory of his father, with his Angels: and then he shall reward every man according to his works.

⑤ 19-28 And Iesus said vnto them, Verily I say vnto you, that ye which haue followed me, in the regeneration when the Sonne of man shall sit in the throne of his glory, ye also shal sit vpon twelue thrones, iudging the twelue tribes of Israel.

⑥ 24-30 And then shall appeare the signe of the Sonne of man in heauen: and then shall all the Tribes of the earth mourne, and thy shall see the Sonne of man comming in the clouds of heauen, with power and great glory.

⑦ 25-31 When the Sonne of man shall come in his glory, and all the holy Angels with him, then shall hee sit vpon the throne of his glory:

Marke

① 8-38 Whosoever therefore shall be ashamed of me, and of my words, in this aduleous and sinfull denegeration, of him also shall the Sonne of man bee ashamed, when he commeth in the glory of his Father, with the holy Angels.

② 10-37 They said vnto him, Grant vnto vs that wee may sit, one on thy right hand, and the other on thy left hand, in thy glory.

③ 13-26 And then shall they see the Sonne of man comming in the cloudes, with great power and glory.

Luke

① 2-9 And loe, the Angel of the Lord came vpon them, and the glory of the Lord shone round about them, and they werw sore afraid.

② 2-13, 14 And suddenly there was with the Angel a multitude of the heauenly hoste praising God, and saying, Glory to God in the highest, and on earth peace, good wil towards men.

③ 2-32 A light to lighten the Gentiles, and the glory of thy people Israel.

④ 4-6 And the deuil said vnto him, All this power will I giue thee, and the glory of them; for that is deliuered vnto me, & to whosoever I will, I giue it.

⑤ 9-26 For whosoever shall bee ashamed of me, and of my wordes, of him shall the Sonne of man he ashamed, when he shall come in his owne glory, and in his Father, and of the holy Angels.

⑥ 9-31 Who appeared in glory, and spake of his deesease, which he shoud accomplish at Hierusalem.

⑦ 9-32 But Peter, and they that were with him, were heauie with sleepe: and when they were awake, they saw his glory, and two men that stood with him.

⑧ 12-27 Consider the Lillies how they growe, they toile not; they spinne not: and yet I say vnto you, that Solomon in all his glory, was not arayed like one of these.

⑨ 17-18 There are not found that returned to giue glory to God, saue this stranger.

⑩ 19-38 Saying, Blessed bee the King that commeth in the Name of the Lord, peace in heauen, and glory in the Highest.

⑪ 21-27 And then shall they see the sonne of man comming in a cloud with power and great glory.

⑫ 24-26 Ought not Christ to haue suffered these things, and to enter into his glorie ?

Iohn

① 1-14 And the Word was made flesh, and dwelt among vs (& we beheld his glory, the glory as of the onely begotten of the Father) full of grace and trueth.

② 2-11 This beginning of milacles, did Iesus in Cana of Galilee, and manifested forth his glory, and his disciples beleued on him.

③ 7-18 He that speaketh of himselfe, seeketh his his owne glory: but he that

seeketh his glory that sent him, the same is true, and no unrighteous-
ness is in him.

- ④ 8-50 And I seeke not mine owne glory, there is one that seeketh & iudgeth.
⑤ 11-4 When Iesus heard that, hee said, This siknesse is not vnto death, but
for the glory of God, that the Some of God might be glorified thereby.
⑥ 11-40 Iesus saith vnto her, said I not vnto thee, that if thou wouldst beleue,
thou shouldst see the glory of God?
⑦ 12-41 These things said Esaias, when he saw his glory, and spake of him.
⑧ 17-5 And now O Father, glorifie thou me, with thine owne selfe, with the
glory which I had with thee before the world was.
⑨ 17-22 And the glory which thou gauest me, I haue giuen them: that they may
be one, euen as we are one.
⑩ 17-24 Father, I will that they also whom thou hast giuen me, be with me,
where I am, that they may behold my glory which thou hast giuen mee:
for thou louedst mee before the foundation of the world.

2 「B・C訳」に見られる「栄光」

また、漢訳は在華宣教師ブリッジマン (E. C. Briggman) とカルバートソン (M. S. Curbertson) の訳した『新約聖書』(咸豊九年 [1859] 刊。以下「B・C訳」と言ふ)であった。この「B・C訳」では、前節に掲げた福音書の章節は次のよう訳されている。

英訳の glory に当たる語に傍線を付し、特に「栄光」と訳されているものには [] を付す。

馬太伝

- ① 4-8 魔鬼復携レ之至極高乃之山、将天下諸国、以及其榮一示レ之。
② 6-13 尤母レ導レ我於誘惑一、乃拯レ我出於惡一。蓋国也、權也、榮也、皆
歸於爾一。爰及二世世一。亞孟。
③ 6-29 惟我語レ爾、即所羅門於其榮華之極一、其衣猶不レ及此之花之一一。
④ 16-27 夫人子将下以父之榮一、偕其諸使一降臨時、必依各人所レ行而報
之。
⑤ 19-28 耶蘇謂レ之曰、我誠告、爾曹已從レ我者、待下至復興一、人子坐
位一時上、爾曹亦将下坐於十二位一、審以色列十二支派上矣。

⑥ 24-30 時、人子兆必現於天一、地上諸族必哭、且見下人子以權与大榮一、
乘天雲一而上来。

馬可伝

- ⑦ 25-31 当人子乘其榮一、偕諸聖使一至之時上、将坐其榮位一。
① 8-38 蓋於此姦惡之世一、凡恥我及我之道一者、迨人子以父之榮一、
偕諸聖使一而臨時上、亦必恥斯人一矣。
② 10-37 対曰、賜下我儕於爾榮時一、一坐三坐右一、一坐爾左上。
③ 13-26 時、衆將見下人子、以大權大榮一、乘雲上来。

路加伝

- ① 2-9 主之使者臨レ之、主之榮光環照之一、牧者大懼。
② 2-13, 14 條有二衆天軍一、偕二天使一讚美神一、曰、在レ上則榮歸於神一、
在レ地則和平、人沐恩澤一矣。
③ 2-32 為レ光以照異邦、為二爾民以色列之榮一。
④ 4-6 魔鬼謂レ之曰、此諸權及二其榮一我將予爾、蓋此悉委レ我、惟我
欲者、則予レ之。
⑤ 9-26 蓋凡恥我及我道一者、則人子以己与父及聖使之榮一而臨時、亦必
恥斯人一。
⑥ 9-30, 31 有二人与レ之言一、即摩西、以利亜。在二榮光中一顯現、
彼得与二同在者一倦而寝、既寤、則見二耶蘇之榮一、及二人偕レ之立一。
⑦ 9-32 試思二百合花、如何而長一、彼不レ勞、不レ紡。我語レ爾、即所羅門
⑧ 12-27 当二榮華之極一、其衣猶不レ及此之花之一一。
⑨ 17-18 此異民之外、未見下返而歸榮於神一者上也。
⑩ 19-38 曰、託二主名一而来之王、福矣、在レ天和乎、在二至上者光榮一。
⑪ 21-27 時將見下人子、以二權及大榮一、乘雲而上来。
⑫ 24-26 基督不レ当如此受レ難而進二其榮一乎。
約翰伝
① 1-14 夫、道成二肉身一、居二我儕之間一、我儕見二其榮一、猶二天父独生之
子之榮一、以二恩寵一以二真理一充滿矣。
② 2-11 此耶蘇始行二奇跡一、在二加利利之迦拿一、而顯二其榮一、門徒則信
之。
③ 7-18 由レ己而言者、求二己之榮一、惟求二遣レ之者之榮一、斯為レ真、而無二
不義於其衷一。
④ 8-50 我不レ求二己之榮一、然有二求者一、即行二審判一者也。

- ⑤ 11-4 耶蘇聞レ之、則曰、此病不レ致死、乃為二神之栄^一、俾二神子以レ之而得^一レ栄。
- ⑥ 11-10 耶蘇謂レ之曰、我非四語レ爾云三、若爾有レ信、則必見二神之栄^一也。
- ⑦ 12-41 以賽亜見二其栄^一、指レ彼而言レ之之時、言レ此。
- ⑧ 17-5 父与、今使二我偕レ爾獲^一レ栄、即創世之先、我偕レ爾所レ有之栄。
- ⑨ 17-22 我以下爾所レ賜レ我之栄^一上而賜^二於彼^一、致三彼為レ一、如二我儕為^一レ一。
- ⑩ 17-24 父与、我之志意、乃使下爾所レ賜レ我者、於二我所^一レ在而偕上レ我、致下彼見中我栄、爾所レ賜レ我者上、蓋爾曾愛二我於創世乃先^一也。
- すなわち、「栄光」の語は「路加伝」にのみ二例現われるだけであるが、これが和訳聖書に現われる「栄光」と深い関わりを持つようである。

3 ヘボン訳福音書に見られる「栄光」

聖書の和訳はヘボン訳以前にギュッラフ (K. F. A. Gutzlaff・中国名善徳纂) の『約翰福音之伝』(一八三七年刊?) などがあるが、「栄光」の訳語は用いられていない(注④)。ヘボン訳においても『路加傳』に見られるだけで、他の福音書には見られない。

次に前節に掲げた福音書の各章節の、ヘボン訳福音書(すなわち『新約聖書卷之一 馬太傳福音書』『新約聖書卷之二 馬可傳福音書』『新約聖書卷之三 路加傳』『新約聖書卷之四 約翰傳福音書』(注⑤)での訳を掲げる(以下、『馬太傳』などと略記する)。刊行年の順に掲げ、英訳の glory に当たる語に傍線を付し、「栄光」の語には□を付す。訳文には句読点を付し、振り仮名は必要と思われるものだけを残すことにする。ただし、「栄光」には「ゑいくわう」と付されている。

『馬可傳』(明治五年[1872]刊)

- ① ゆゑに、およそ姦悪なる世において、われとわがことは恥るものは、人の子もまた清き使とともにその父の光明をもつてきたるとき、このものを恥べし。(8-38)
- ② かれらいひけるは、御威光のあるとき、われらのひとりはおなたの右、ひとりはおなたの左に坐さしたまへ。(10-37)
- ③ そのとき、人々、人の子おほひなる權威と光明をもつて雲のうちにきたるをみるべし。(13-26)

『約翰傳』(明治五年[1872]刊)

- ① それ、言靈人になりて恵とまこと、をみて、われらのうちにやどり、われらの栄きを見るに、父のひとりうみたまひしもの、栄きがごとし。(1-14)
- ② これ耶蘇ガリラヤのカナにて奇跡をなすのはじめにして、その貴をあらはし門徒を信ぜり。(2-11)
- ③ おのれによりていふものはわがほまれをおもふものなり。つかはせしもの、ほまれをおもふのはこれまことにしてわれにもよこしまなし。(7-18)
- ④ われはおのれのあがめをうけず。はかるものとおつみをさだむるところのものあり。(8-50)
- ⑤ 耶蘇これをき、ていひけるは、このやまひは死するにあらず、神のちからをあらはし神の子をあがむるためなり。(11-4)
- ⑥ 耶蘇かれにいひけるは、もし汝信じなば神の威光をみると、われ汝にいひしにあらずや。(11-40)
- ⑦ このことはエザヤがかれのあがめをえ耶蘇についてはなせしときにいへり。(12-41)
- ⑧ 父よ、われ世のはじめのまへに、あなたとともにありしあがめをもつて、われをあがめたまへ。(17-5)
- ⑨ また、あなたのおれにたまひしあがめをかれらにさづけり。こはわれらのひとつにあるごとくかれらもたがひにひとつにならんためなり。(17-22)
- ⑩ 父よ、われにたまひしものは、わがをるところにかれらもわれにたまひしあがめをみるとともにをることをほつす。いかんとなれば、あなた世のはじめのまへにわれをいつくしめばなり。(17-24)

『馬太傳』(明治六年[1873]刊)

- ① あくまかれをいとたかき山につれゆき、世界の国々とその栄とをみせて、われらをこゝろみらるゝことにみちびきたまはず、かへつて悪よりすくひなだしたまへ。国と權と威光とはあなたのかぎりなくもちたまふものなればなり。(6-13)
- ② されど、われなんぢらにつげん、ソロモンだにもそのすべての栄にこの花のひとつほど糞はざりき。(6-29)
- ③ それ、人の子その父の威光をもつてそのつかひたちとともにきたらんとす。そのときそのおこなひによりておのくゝにむくふべし。(16-27)
- ④ 耶蘇かれらにいひけるは、まことに汝らにつげん、われにしたがひし汝らは世のあらたまるるときに、人の子そのたつときくらるにざし、汝らもまたイス

ラエルの十二の支流を支配して十二のくらみにさすべし。(19-28)

⑥そのとき人の子の兆天にあらはれ、また地上にある庶族なげき、人の子權威をおほひなる光明ありて天の雲にのりきたるをみるべし。(24-30)

⑦さて、人の子おのれの威光にて、もろくの聖なるつかひをつれきたるときには、その威光あるくらみに坐し、(25-31)

『路加傳』(明治八年[1875]刊)

①主の天使きたりて、主の**栄光**かれらを環照すれば、牧者おほいにおそれたり。(2-9)

②忽おほくの天軍あらはれ、天使とともに神を讚美していひけるは、天上のころには**栄光**神にあれ、地には平安、人にはめぐみあれ。(2-13,14)

③これ異邦人を照さん光なり。また、なんぢの民イスラエルの栄なり。(2-32)

④いひけるは、このすべての權威と栄華をなんぢにあたへん。われこれをまかされ、これば己が所欲ものにこれをあたふべし。(4-6)

⑤われとわが道をはづるものをば、人子もまた、わが**栄光**と父の聖使の**栄光**をもて臨ときこれをはづべし。(9-26)

⑥ふたりの人あり。これとものいへり。即ちモーセとエリアなり。**栄光**のうちにあらはれて、(9-30)

⑦ペテロおよび同ありしものども困倦ねむりしが、すでに寤て耶蘇の**栄光**またともに立る二人を見たり。(9-32)

⑧百合花はいかにして長かをおもへ。勞す紡がざるなり。我なんぢらにうげんソロモンの栄華の極のときだにも、この花の一朵ほどもよそはざりき。(12-27)

⑨この異邦人のほかに神をあがめんとてかへりしものにあらざるか。(17-18)

⑩主の名にて来たたまへる王は福なり。天においては平安に、いと高きところに**栄光**あるべし。(19-38)

⑪そのとき人々は人の子權威とおほいなる**栄光**をもて雲にのりきたるを見るべし。(21-27)

⑫キリストはこれらの難をうけてその**栄光**に進べきにあらずや。(24-26)

4 『新約聖書卷之三 路加傳福音書』について

『栄光』の訳語が見られる『路加傳』の訳文は、他の福音書とは異なる状況で成立している。

新教各派代表の宣教師が新約聖書の翻訳を行なうことを決議したのは、ヘボンが私的に四つの福音書の和訳を終えた後の、明治五年九月二十日のことであった。聖書翻訳委員社中の長はブラウンであり、委員はヘボンとグリーン(D.C.Green)等であり、日本人補助者として奥野昌綱、松山高吉、高橋五郎、井深樞之助等がいた。この会が実際に翻訳に着手したのは明治七年三月二十五日のことである。福音書の翻訳責任者はヘボンであった。ヘボンは訳し終えていた自らの訳を改めてこの委員社中の場で再検討したことになるわけである。

ところで、翻訳委員社中では新約聖書所収の各書の翻訳が完成するに従って木版に付し、分冊の形で随時出版したが、新約聖書完成祝賀会でのヘボンの演説によると、各分冊の刊行年は次のとおりである(注⑥)

Luke	Aug.	1875
Romans	March	1876
Hebrews, Matthew (revised)	Jan.	1877
Mark (revised)	April	1877
Epistles of John	June	1877
Acts	Sept.	1877
Galatians	Jan.	1878
Gospel of John (revised)	May	1878
1 Corinthians	Aug.	1878
2 Corinthians	Aug.	1878
Ephesians, Philippians, 1 and 2 Thessalonians	June.	1879
Philemon, James, 1 and 2 Peter, Jude, Colossians, and Revelation	April	1880

これによると、Matthew (ブライ伝)、Mark (マルコ伝)、John (ヨハネ伝)は revised (改訂版)とされている。しかし、それ以前に翻訳委員社中がそれらの福音書を刊行したことはないようである(海老沢有道『日本の聖書』p.193)。したがって、ヘボンはヘボンが翻訳委員社中発足以前に私的に訳し刊行していたものに対して、これらを revised (改訂版)と言ったものと思われる。すなわち、ブラウンの一八七七年(明治十)四月十二日付 J・M・フェリス宛書簡(注⑦)に、

「マタイ、マルコ、ルカによる福音書は、改訂を終わり、新しい版が印刷され、それからヨハネによる福音書が、今、改訂されつつあります。これらの版は、それら福音書の、最初の翻訳に、大きい改善を加えており、古い版と新しい版とを比較しうる人ならば、新しい版が、共同委員会の価値ある労作、否なくて

はならない労作であると断言することをはばかりません。

とある「古い版」がヘボンがブラウンの援助によって訳し、私的に刊行したものであり、「新しい版」が翻訳委員社中において改訂して刊行されたものに当たるとある。とすれば、ヘボンは私的に刊行したものと委員会から公的に刊行されたものとを区別していないことになる。翻訳委員は「古い版」に関わっていたブラウンとヘボンの外はグリーンだけであったことを考えれば、ヘボンとしての意識はそのようなものであったのであろう。

ところで、ヘボンはJike (ルカ伝) についてはrevised (改訂版) と言っていない。しかも、翻訳委員社中訳として公的に「路加伝」が刊行されたのは明治九年(1876)のことであるのを、ヘボンはその前年の明治八年の刊と言っている。明治八年に刊行されたものは、前節に挙げた、唯一、委員社中で検討を経、ヘボンが私的に刊行した『路加傳』である。おそらくこの『路加傳』は他の福音書の訳文とは異なり、「古い版」の改訂といった程度のもの以上の「大きな改善」が委員会においてなされたことを意味するのであろう。ヘボンの一八七五年(明治八)七月二十三日付ローリー宛書簡に「聖書翻訳委員会、わたしはその一員ですが、この委員会は毎週四日間開かれており、ルカ伝はやつと出版されました。相当立派な訳文です」と見える。委員社中における改訂はヘボンも満足に行くものであったようである。ヘボンの明治八年刊『路加傳』と翌年刊行された委員社中訳『路加伝』とは、以上のような関係にあり、極めて似た文章となっている(注⑧)。したがって、ヘボンにとっては明治八年刊『路加傳』は特にhis own というものではなかったのであろう。しかし、現在では明治八年刊『路加傳』を委員社中の「試訳」と捉える説もある(注⑨)。

ただし、ヘボン刊の福音書の内題には、既に示してきたように「新約聖書卷之一 馬太傳福音書」「新約聖書卷之二 馬可路加傳福音書」「新約聖書卷之三 約翰路加傳福音書」とあるが、この書でも「新約聖書卷之三/路加傳福音書」と書かれている。これに対して、委員社中刊の内題は「新約全書 路加傳福音書」「新約全書 馬可傳福音書」などとなる。委員手中訳が正式に刊行される前にヘボンが個人で『路加傳』を刊行したのは、右に引用したローリー宛ヘボン書簡に「聖書が一日も早く一般の人々の手に渡るために、わずかの集金だけで個人訳を出版することに決めました」とあり、そのような理由からであろう(注⑩)。

いずれにしても、このヘボン刊『路加傳』に和訳聖書初の「栄光」が見られるのである。

改めて、他の福音書も含めて、英訳聖書の *glory* に対するヘボン訳福音書の訳語と委員会訳福音書(明治十三年刊『新約全書』)の訳語との関係がどのようなになっているのかを対比すると次のようになる。合わせて「B・C訳」の訳語をも示す。翻訳委員会における分冊の刊行順に掲げる。

約翰伝			馬可伝		馬太伝			路加伝											
①	②	③	①	⑦	①	⑫	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	
栄・栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄
栄き・栄き	光明	威光	光明	威光	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄
栄・栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄	栄

『新約全書』 ヘボン B・C

②	栄	貴	栄
③	栄・栄	ほまれ・ほまれ	栄・栄
④	栄	あがめ	栄・栄
⑤	栄・栄	ちから・あがむ	栄・栄
⑥	栄	威光	栄
⑦	栄	あがめ	栄
⑧	栄・栄	あがめ・あがむ	栄
⑨	栄	あがめ	栄
⑩	栄	あがめ	栄

すなわちへボン訳では『路加傳』にのみ用いられていた「栄光」は、委員会では「路加傳」ばかりではなく、「馬太伝」「馬可伝」にも用いられており、「栄光」は英訳 *glory* に対する訳語として採用されたかに見える。しかし、「約翰伝」では「栄光」の語は用いられず、「さかえ」が用いられている。その理由は不明である。

5 「天上ところには栄光神にあれ」

ところで、明治七年〔1875〕七月八日の翻訳委員社中の記録に、ルカによる福音書第二章十四節に見える頌栄は、

イト タカキ ニ オイテ ワ ホマレ カミ ニ。チ ニ オイテ ワ
オダヤカ メグミ ニンゲン ニ
(原文ローマ字)

と訳すことに決したことが記されている (Records of the Committee for the translation of the bible into the Japanese Language. [聖書翻訳研究] 一三三〔1985.12〕)。明治七年十二月に神戸で出版された讚美歌集の表紙にも、ブラウンが祝詞として贈ったとされる頌詞、

いと高きにおいてはほまれかみに地においてははをだやかめぐみにんげんにが印刷されている(注⑪)。

しかし、明治九年刊の翻訳委員社中訳「路加傳」では、
天上ところにはえいくわう神にあれ。地には平安。人にはめぐみあれ。

とあり、その前年に刊行されたへボンの『路加傳』と同じである。したがって、明治七年七月八日の翻訳委員社中の決定は、その後一年足らずに改められたことになるが、この改訳は誰によってなされたのであろう。

グリーン (D. C. Greene) による翻訳委員長としてのブラウン評に次のようであ

る(注⑫)。

聖書翻訳に従事せらるゝ中、非常に苦心せられた結果、同博士自らも満足せられた程の出来栄えとなつたのは、基督降誕の時、天の使達が歌うた頌栄の翻訳である。即ち

天上ところには栄光神にあれ地には平安人には恩澤あれ
といふ一句である。

これによって、グリーンはこの頌栄の翻訳に努力していたことが分かるが(注⑬)、「同博士自らも満足せられた」というのは、ブラウンみずから改訳したことを意味しているとも、翻訳委員社中における苦心の末に得られた訳に対して委員長として喜びを語ったものとも読み取れる。

6 『和英語林集成』における「栄光」「栄華」

へボンの『和英語林集成』に「栄光」の語が収録されたのは、『路加傳』が出版された後の三版(明治十九年〔1886〕刊)のことである。

EIKO エイクワウ 栄光 n. Glory, splendor. Syn. SAKAE, EIYO.
初版(慶応三年〔1867〕)には「ちかえ」の語だけが見え、

SAKAE, -RU サカエル 栄 i. v. To flourish, to prosper, bloom: toni-sa-kaeru, to be rich and flourishing: ine ga ta ni -, rice flourishes best in wet soil.
第二版(明治五年〔1872〕)には名詞「ちかえ」の語も加えられているが、「栄光」の語は見えない(注⑭)。

SAKAE サカエ 栄 n. Full bloom, illustrious or glorious condition, prosperity, welfare: exaltation, glory: oya ga ko no - wo nego, the parent desires the welfare of his child: kuni no - the prosperity or glory of a state.
したがって、へボンが奥野昌綱らの援助によって私的に訳していたルカ伝(現存しない「古い版」)においては、「栄光」は「さかえ」あるいは「ほまれ」「あがめ」などと訳されていたものと思われる。奥野作の讚美歌(注⑮)にも、

たかきところの かみにはさかえ ちにはおだやか ひとにはめぐみ
(基督の降誕)

かみにはみさかえ 地にへい和 すべてのはとには めぐみあれ (同上)
たかきところなる かみにはさかえ つちにはおだやか ひとにはめぐみ (同上)

とだけあり、「えいくわう」は現われない(注⑯)。

とくろで、『和英語林集成』の三版で「栄光」の語のSynonym (同義語)として挙げられているSAKAE (栄) は (Full bloom (満開) の意味は措く) 同く三版では「有名な(著名な・顕著な・秀れた・輝かしい・賞賛に値する) 状態(地位・状況)」「財産、所有物」「幸福、繁栄」「昇進、賞揚、高揚」の意味とされ、またgloryの意味ももつてゐる。gloryは英和の部では常に掲出順一位の訳語として「栄耀」(Yeiyō, Eiyō) が挙げられている語である。

初版 Yeiyō, yei-gwa, ogori, kagayaki, hikari, homare; iko.

二版 Yeiyō, kagayaki, hikari, homare, ikuwo, komiyo, go-kuwo.

Evening—of the sky, yu-yake. Morning—of the sky, asa-yake.

三版 Eiyō, kagayaki, hikari, homare, sakae, eko (栄^⑩), komiyo, go-ko,

Evening—of the sky, yu-yake. Morning—of the sky, asa-yake.

注目されるのは「栄耀」が儂く人間のgloryと説明されていることである(第三版で示せば次のとおり)。初版にはluxuryを—gui, luxurious eatingの部分(なご)。

EIYO エイエフ 栄耀 (sakae kagayaki) Glory; magnificence; splendor. pomp.

luxury: ningen no —wa fuzen no chiri, human glory is like the dust before the

wind: —gui, luxurious eating. Syn. EIGA, OGORI.

傍線部からも窺ふべし、へボンは「栄耀」に対するこのような理解を古典文学(『平家物語』)から得たものと思われる。

右のことと合わせて、やぶに注目されるのは、二版以降の英和の部においてgloryの訳語としてyei-gwa・EIGWA (栄華) とogori (奢) の語が見えなくなっていることである。これらの語は和英の部では次のように説明されている(初版から見られるが、第三版で示す(注^⑩))。

EIGWA エイゴフ 栄華 n. Splendor; magnificence; luxury; sumptuousness:

—ni kurasu, to live sumptuously. Syn. OGORI.

OGORI オゴリ 奢 n. Extravagance, luxury, or splendor in living: —ni

chozuru; —ga sugie shinsho no kubusu, ruined his fortune by extravagance.

Syn. SHASHI.

二版以降にgloryの訳語としてこれらの語が用いられなくなると、三版に「栄光」の語が現われるのは無関係ではないであろう。

以上のことから、へボンは「栄光」を神のgloryの訳語として用い、「栄耀」「栄華」「奢り」には人のgloryに用いて、しかも否定的な価値を認めているようである(注^⑩)(注^⑪)。

7 和訳聖書における「栄華」

所謂「明治元訳」と呼ばれる明治期の文語訳には、へボンの「栄光」に対する語意識は徹底されていないようである。「明治元訳」においても「栄光」は神のgloryに用いられているが、神のgloryのすべてが「栄光」と訳されているわけではなく、人のgloryと同じく「栄」「榮」の語で訳されているものが多い。例えば「ヨハネ黙示録」第十九章一節は「B・C訳」では、

此後我聞^二群衆之大声在^一天曰、讚^二美主^一乎、願拯救^二榮光^一尊貴權能^二歸^一於主我神^一也。

とあるにもかかわらず、「明治元訳」では

此後われ許多の人の呼が如き大なる声の天に在を聞り。曰、ハレルヤ救と榮と權力は我儕の神の有ち給ふ所なり。

と訳している。

ただし、人の世俗的なgloryを「栄華」と訳することは「明治元訳」でもへボンと同じである。

○(悪魔)曰けるは此すべての權威と榮華を爾に予ん。我これを委任たれば我が欲む者に之を予ふべし (路可伝4-6)

And the devil said unto him, All this power will I give thee, and the glory of them: for that is deliered unto me, & to whomsoever I will, I give it. (Luke 4-6)

○百合花は如何にして成長かを思へ、勞ず紡がざる也。我爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時だにも其装いの花の一に及ぶり也。(路可伝12-27)

Consider the Lillies how they growe, they toile not: they spinne not: and yet I say vnto you, that Solomon in all his glory, was not rayd like one of these. (Luke 12-27)

前者は悪魔がイエスを誘惑する場面であり、後者は所謂「ソロモンの榮華」の例である(「馬太伝」4-8と6-29)に見える「栄華」も同じ)。

漢訳の「B・C訳」においても、「栄光」と「栄華」との意識的な使い分けは認められない。「B・C訳」では英訳のgloryに当たる訳語には「榮」を用いるのが原則である。例えば「明治元訳」では「榮光・尊貴」「榮華」「榮光」と区別されている次の例も、「B・C訳」ではすべて「榮」と訳されている。

耶和華歎、王將以^二爾力^一而喜、以^二爾之救^一而甚喜兮。…以^二爾之施救^一、其

栄乃大、爾必加れ之以レ威以レ栄兮。

(詩篇二十一篇)

魔鬼復携レ之至ニ極高乃之山ニ將ニ天下諸国以及其栄ニ示レ之、且謂レ之曰爾若俯伏拜レ我我必以レ此悉賜レ爾。

(馬太伝18:9)

條有二衆天軍一偕ニ天使ニ讚ニ美神ニ曰、在レ上則栄帰ニ於神ニ在レ地則和平人沐ニ恩澤ニ矣。

(路加伝2:13,14)

「B・C訳」でも「ソロモンの栄華」には「栄華」が用いられているが、「列王紀略下巻目録」また「歴史志略目録」には「所羅門王在位歴四十年、其時、国体大有ニ栄光」とある。また、これとは逆に「明治元訳」では、

なんぢ我審判を廢てんとするや。我を非として、自身を是とせんとするや。なんぢ神の如き腕ありや。神のごとき声をもて轟きわたらんや。さればなんぢ威光と尊貴とをもて自ら飾り、栄光と華美とをもて身に纏へ。(約百記08-10)

とあるものが、「B・C訳」では、

爾能廢ニ我之義鞫一乎。爾可三罪レ我、致ニ爾自為一レ義乎。爾有レ臂レ如レ神、爾能以レ声レ如レ彼而施レ雷乎。今爾可下以ニ尊貴威嚴ニ自飾上、可下以ニ榮華嘉美ニ自衣上。

とある。

おわりに

ヘボンの「栄光」の使用意識は「大正改訳」(大正六年〔1916〕刊)改訳「新約聖書」において徹底されている。現在「栄光」の語は「被造物と一致し、その中に現存する神の愛を表現するための、聖書神学の基本概念」を表わす術語(『新カトリック大事典』同編纂委員会編輯、研究社、平成八年〔1996〕)となっているが、これは、「大正改訳」における用いられ方によるものと思われる。

注① ローマ字本『こんてむつすむん地』(一五九六年刊)では「広大な快樂」と訳されているが、この訳は後採用されることはなかった。小島幸枝編著『コンテムツスムンヂの研究 資料編』(武蔵野書院、平成二十一年刊)の翻字によって示す。

○報謝を受け奉る事遅きに於ては、時刻至りて受け奉るべきこの広大な快樂の為に覚悟もなく、いまだその功力に及ばずと分別して、この世を出づべき時節の覚悟をなすべき事也。

注② 明治六年(1873)のニューヨークのミッション本部でのヘボンの講演「日本

ミッションの起源」に、

一八六七年(慶応二年)八月、バラ師とタムソン師とわたしがマタイ伝を翻訳するため施療所に集まったが、これは約九カ月かかって完了し、その翻訳は再度わたしが改訂し、さらにS・R・ブラウンとわたし自身とで改訂したのでありますが、これは一八七三年(明治六年)に出版した最初のマタイ伝の基礎となっているのです。しかしこれより前、一八七一年(明治四年)S・R・ブラウンとわたし自身とがマルコ伝の試訳を改訂しました。これは一八七二年(明治五年)の秋出版され、それからまもなくヨハネ伝が出版された次第です。

とある(高谷道男編訳『ヘボン書簡集』岩波書店、1957年刊p.219以下)。また、グリフィス(W. E. Griffiths)の『Hepburn of Japan and his Wife and Helpmates』には、ヘボンは明治三年(1870)以前に四福音書を奥野昌綱の援助によって和訳し終え、さらにブラウン(S. R. Brown)と奥野の援助を得て訂正してつたと言ふ(Dr. Hepburn had translated the four Gospels with the help of Okano, and these were revised by Dr. S. R. Brown and himself, with Okano's assistance. p.142)。

注③ 井深梶之助の談(『続横浜回顧(二) 聖書翻訳者としてのブラウン博士』、『福音新報』一四三五号、大正十一年〔1922〕十二月発行)に次のように説明されている。

室の中央に一脚のテーブルがあつて、…そのテーブルの上に開いてある書物は、ブラウン氏とグリーン氏の前には三種の希臘原文の聖書、ヘボン氏の前には英語の新約註解書、日本人の前には文法や官話やその他の支那翻譯の聖書といふ風であつた様に記憶する。

注④ ギュツラフの『約翰福音之傳』(1837)では「クライ」「ジギ」、ベッテルハイムの『路加福音書』(1858, 1872)、『ゴープルの『摩擦太福音書』(1871)では「栄華」「サカリ・サカエ」が用いられている。

注⑤ 『馬可傳』『馬太傳』『約翰傳』は『近代邦訳聖書集成』(ゆまに書房1996)、『路可傳』は明治学院大学図書館「聖書和訳デジタルアーカイブス」による。フルベッキの『Tokyo Missionary Conference』pp. 816-826の中に記されたヘボンの話による(『植村正久と其の時代』[教文館、昭和十三年刊]第四卷pp. 103-110)。

注⑦ 高谷道男編訳『B・C・ブラウン書簡集 幕末明治初期宣教記録』(日本基督教団出版部、1965年刊)による。またヘボンの書翰も高谷道男編訳『ヘボ

ン書簡集』(岩波書店、1959年刊)による。

注⑧ 例えば「アロンの裔にて名はエリザベツといへり」とあるところが委員会訳では「アロンの裔にて名をエリザベツといふ」とあり、「エリザベツ、マリヤの問安をき、しかばそのはらみ子胎内にて喜躍れり」とあるところが「エリザベツ、マリヤのあいさつをき、しかばその胎孕はらのうちにて跳動たり」とあるなど、語の表記や助動詞に異なるものがあり、語句の順序が変わっていたり、過去形で語られているものが物語現在に直されたりしている。この違いが『路加傳』を刊行する時に、再度手を加えたものであるのか、委員会刊が発行するときに訂正されたのか不明である。

注⑨ 財団法人日本聖書協会発行『聖書協会一〇〇年史』(1975年刊)など。これに対しヘボン・ブラウン訳とする考えは、海老沢有道氏の採る考えである(『日本の聖書』(日本基督教団出版部、1964年刊)第六章Ⅲ「一八七五年版『路加伝』」)。

注⑩ B・C・ブラウンの一八七四年(明治七)四月三日付J・M・フェリス宛書簡に、

委員会としてのわたしたちの仕事(引用者注―聖書和訳)は、あまりはかどらないと思って、ヘボン博士のごときは、一時、委員会を離れて、独力でやろうとした傾向さえありました。それで、博士が昨年、アメリカから帰って来られた時に、独立して自分の翻訳を出版しようと思いい、場合によっては、共同委員の地位を辞しても、そうしようと決心していたようです。しかしもしそうした個人訳は日本在住の宣教師の承認が得られないので、今では、委員として継続することに同意して、一致してやっておられます。

と見える。しかし、ヘボンは「わずかの集成」とし福音書の個人出版したものである。

注⑪ 『植村正久と其の時代』第四巻p.383にはこの讚美歌集の表紙の写真を載せる。海老沢著『日本の讚美歌』には次のような説明がある(p.345)。

アメリカンボードのベリーJ.C. Bayの編纂。一八七五年(明治八年)刊の、このローマ字版神戸女学院本の英文書込みに特に七五調でなされたことと、奥野、関氏の功によつたことが記され、同志社本には本間重慶氏の「明治七年の頃神戸公会の連中になりし小野俊二、前田泰一、松山高吉及宣教師ベレー医師などが編纂せしものにて、表紙に記しある聖語は横浜のブラオン教師〔著者註プレズビテリアンのブラウンS.R.

Brownであらうか〕が祝詞として贈りしものである。但し表紙及び序文の筆記者も松山高吉にして、後者の作者も同氏である」との解題が附されてゐる。即ちこの歌集の表紙には題が無くルカ傳第二章十四節の聖句

いと高きにおいてははまれかみに地においてはをたやかめくみにんげんに

と変体仮名で印刷されて居る。序は擬古文で名文ではないが、その終に「いまの世の歌てふものに式にはあらざれど、人ないふせかりそ、なあざけりぞ」とあるのは、新詩型創作時代の人の語として注目するに足りよう。

また、上田貞治郎編『上田文庫聖書館 基督教古典図書目録』(昭和十五年[1940]刊)にも、

をしへのうた 和本 木版刷半紙本 十七枚 神戸上梓 明治七年四月

神戸にてベレー宣教師、前田泰一、松山高吉、小野俊二等の協賛により編て輯せしものなり。表紙の聖句はブラオン教師祝意を表して贈られ序文は松山牧師の自作自筆である。神戸の攝津第一公会(組合神戸教会の前身)にて初めて用ゆ。歌数八首。故松山先生より伝聞す。

注⑫ 井深梶之助口述(『学生運動』昭和二年三月号)。ただし、山本秀煌編『日本基督教会史』(日本基督教会事務所、昭和四年[1929]刊、p259)から引用。

ちなみに、ジェームス王欽定訳の頃には発見されていなかった初期写本(シナイ写本、ヴァチカン写本など。ともにA. D. 325-350頃のもの)では、英

注⑬ 訳の、

Glorry to God in the highest, and on earth peace, good will towards men.

あるいは漢訳の

在上則榮歸^レ於神^一、在^レ地和平、人沐^二恩沢^一矣。

のように、天地人に分けて、それぞれにglory (「栄」) peace (「和平」) good will (「恩沢」)を配するのではなく、神の栄光と人の平和を対にしたものである、という。ネーサン・ブラウン(Nathan Brown)の『志無也久世無志与』(明治十二年[1879]刊)では、

もつとも たかき ところには かみに はまれ、ちには おだやか、

にんげんには めぐみ あれと いへり。

と訳され、「さには」以下の行間に「teiniwa megumi aru honi aru odayaka areto」とある(覆刻『志無也久世無志與』新教出版社2008刊)(同著別冊の川島二郎著『ネイサン・ブラウンと『志無也久世無志與』の付録I「ネイサン・ブラウン訳三版本(教訳者版『浸禮教会新約全書』1887「奥付」参照)。平野保監修・川端由喜男編訳『日本語対訳 キリシヤ語新約聖書』(教文館1993刊)でも次のようにある(原文はThe Greek New Testament, Third Edition, Corrected, United Bible Societies, 1983.) キリシヤ語の本文を省略し、逐語訳された日本語のみを示す。①から⑪の番号は日本語に交換する順序を示す)。

栄光④・で②・いと高きところ①・神に③・そして⑤・上に⑦・地の⑥・平和⑩・に⑩・人々⑨・喜ばれる(神に選ばれた)⑧

⑧の「喜ばれる(神に選ばれた)」と対語訳されているギリシヤ語は *euforouo* であるが、この語は「善意」「気に入ること。嘉納。満足。悦び。愛顧」の意味であり、岩隈直著『新約ギリシヤ語辞典』(山本書店971年刊)には、このルカ伝の用例は形容詞の属格用法で「神に喜ばれる」の意味のヘブル語法、と説明している。ヘボンや翻訳委員社中はジェームス王欽定訳を基にしているので、この初期写本が反映していない訳になっているが、「大正改訳」では、

いと高き処には栄光、神にあれ。地には平和、主の悦び給ふ人にあれとなつてゐる。

注⑭ 『和英語林集成』の編輯にヘボンが参考にしたメドハースト W. A. Medhurst の『英和・和英語彙』(1830年刊)には「栄光」の語はみえなない。

注⑮ 黒田惟信編『奥野昌綱先生略伝並歌集』(一粒社、昭和十一年刊)による。例えば『新撰讚美歌』(明治二十三年〔1890年〕刊)に、

天上ところには、えいくわう神にあれ。地には平安。人にはめぐみあれ。(第二百八十六 讚詠文 天上の栄)

と見える。ただし、讚美歌では和語「さかえ」の語が多く用いられているようである。

あまつつかひと ともにうたへよ たかきところに かみにはさかえ
地にはおだやか ひとにはめぐみ こはわがきみの たまものなるぞ

(第六十 聖子 降誕)

注⑯ *eiko* とあるのは *eiko* の誤りかとも思われるが、記載順序から見ると初版の *iko*

また二版の *ikawo* (威光) に当たるので、*iko* の誤りであろう。

注⑰ *yei-gwa* [栄華] の *Syn.* が初版では *YEIYO*、二版では *OKORI* (*OGORI* の誤りか) とある。また *ogori* (奢) の例文に初版と二版では *ni chozuru* の代わりに *ni kuzusu, to live in luxury* とある。

注⑱ ヘボン以前のベッテルハイムの訳では、キリスト降誕の際に「ヌシノ栄華カコミテル」(路加伝福音書第二章九節)など見え、明治五年(1872)頃にバラ (James H. Ballagh) が訳した讚美歌にも、

ヨキ土地アリマス、タイソウ遠方、尊者栄華ニ立ツ、日出ノヤウ、ア、カレウマク、主救者ホメル、名拳ケ高ク、讚美歌セヨ、

とあり、「栄光」と「栄華」は区別されていないように思われる。

注⑲ 小塩力・山谷省吾監修『旧新約聖書神学辞典』新教出版社(961刊)に次のような説明が見える。旧約聖書において「栄光」と訳されている原語ヘブライ語の中で、旧約神学、特に祭司的神学において重要なものはカーボートという語であるが、この語は神以外の族長・王・貴人・国などに対しても用いられている。しかし、その場合は、この語の原意である豊かさや権威などを表わす語として用いられ、したがって口語訳では、神の恩寵によって与った二三の例を除いては、「栄光」という訳語を用いることを注意深く避けている。また、新約の原語ギリシヤ語の *doxasa* の意味は、旧約のカーボートの意味を継承している(以上、摘要)。以上のような説明によると、ヘボンの「栄光」と「栄耀・栄華」の語との区別には、こうしたことを踏まえられているのかも知れない。

